

# 河内国土屋家文書について

水 野 恭 一 郎

## はじめに

土屋家文書は、中世河内国茨田郡伊香賀郷（現在の枚方市伊香賀付近）の地頭であつた土屋氏の家に伝わる文書で、現在の所蔵者は京都市南区東九条河西町居住の土屋宗和氏である。土屋家文書の影写本は京都大学国史研究室に架蔵されたものがあるが、この文書の原本に私がはじめて接する機会を得たのは、仏教大学国文学科の高橋貞一教授の御紹介によつて、昭和五十年五月初旬に、同文書を土屋家から預かり保管されていた山田紫光氏を上賀茂竹鼻町の御宅に訪ね、山田氏の御好意により文書を拝見したときであつた。その後、同年八月初旬にも再度山田氏宅へお邪魔して調査させていただいた。

土屋家文書は南北朝時代前後のものが多く、それを中心に五十通あまりが伝存しているが、このたびの調査を機会に、山田氏の御諒解を得て、そのうちの主要なるもの、およそ四十通をここに掲げて紹介し、併せて、河内国伊香賀郷の地頭土屋氏について、若干の考察を試みたのである。

土屋氏が河内国伊香賀郷の地頭職にはじめて補任されたのは、後掲の土屋家文書六・三三・三五・四〇などに記されているところによれば、承久の乱の勲功の賞として承久三年九月六日に拝領したという。しかし現存の土屋家文書の中には、このときの地頭職補任状は正文も案文も伝わらず、且つ、地頭職を拝領した人物の名も明らかでない。土屋家に所蔵される系図も、中世に関しては極めて不備なものであるが、系図によれば、伊香賀郷の土屋氏がその遠祖としているのは、土屋三郎宗遠である。

伊香賀郷の土屋氏の祖が、この三郎宗遠であるとすれば、宗遠は、源頼朝が治承四年伊豆に挙兵して以来、その麾下の有力な武将の一人として、『吾妻鏡』にもその名がしばしば出てくる人物である。『系図纂要』所収の「土屋系図」や、『続群書類従』所収の「千葉上総系図」・「土屋系図」などによれば、宗遠は坂東平氏のうち平良文の流で、良文から六代の孫にあたる父の宗平は、相模国余よろぎ綱郡中村莊に住して、「中村莊司」の名をもって呼ばれた。また宗遠の兄は、頼朝の腹心の将であった土肥次郎実平で、相模国足柄下郡土肥地方を本領とし、宗遠は同じく相模国大住郡土屋莊に住して、土屋氏を称するようになった。土屋莊は現在の神奈川県平塚市土屋のあたりである。いづれにしても土屋氏は、坂東平氏の一流として、早くから相模国の西南部のあたりに、一族とともに繁衍した東国武士の家筋であったのである。

承久の乱のころには、土屋氏の始祖たる宗遠はすでに没し、子息宗光が家督を継いでいたが、この宗光も『吾妻鏡』に、弥三郎もしくは左衛門尉宗光として、しばしばその名がみえ、父宗遠と同様に鎌倉の有力な御家人の一人であった。殊に文暦元年には幕府の評定衆に列せられており、また、その翌年の嘉禎元年（一二三五）五月十五日死去にあたっては、『吾妻鏡』に「十五日丁未、土屋左衛門尉平宗光卒、年五十二」と、特に宗光死去の記事を載せているほどで

あつて、宗光がそのころ鎌倉の御家人の中でも重きをなした存在であつたことが察知される。そして、死去の年齢は「年五十二」と記されているから、承久の乱の年、承久三年（一二二二）には、宗光は三十八歳であつたことになり、最も働ざかりの年齢であつたといえる。これらのことから推考して、承久の乱に勲功の賞として河内国伊香賀郷地頭職を付与された人物は、この土屋左衛門尉宗光であつたとするのが妥当ではないかと思われる。

しかも、承久の乱以前の伊香賀郷は、土屋家文書六の土屋宗直申状の中に、

当郷所務事、守本司能登守秀康知行例、所致其沙汰也、雖為承久勲功之地、或守本司例有下地進止郷、或追新補率法之例知行所在之、郷々所務皆以追本司跡、所致其沙汰也、

とみえていることから察せられるように、承久の乱のとき、京方の張本の一人であつた能登守藤原秀康の知行する所領であつた。<sup>③</sup>当時、秀康が保有した所領のすべてについては明らかにし難いが、乱後、秀康は弟秀澄とともに京都から逃れて、河内国讃良郡（さうら）のあたりにかくれ、承久三年十月六日この地で捕えられ、やがて斬罪に処せられている。<sup>④</sup>讃良郡は、伊香賀郷のある茨田郡の東南に隣接する地域であるが、文書六に、前掲の引用記事につづいて、「本郷甲可郷」として記されている讃良郡内の甲可郷（こうか）が、秀康の本領的な所領であつたとも推察され、これら讃良・茨田両郡をふくむ北河内の一帯が、恐らく秀康の本拠の地であつたことは、ほぼ確かであると思われる。このような、承久の乱の張本人藤原秀康がもと知行した所領の一つであつた要地伊香賀郷の地頭職が、特に選ばれて土屋宗光に付与されたということは、宗光が当時、鎌倉御家人の中でも名ある武将の一人であつたことからして、十分考え得るところである。

以上のような推論から、承久の乱後、新補地頭として、はじめて伊香賀郷の地頭職に補任されたのは、土屋左衛門尉宗光であつたと考えられるが、その後、嘉禎元年死去のときにいたるまで、宗光自身、相模の本領の地を離れて、この畿内の新恩の所領に居を移した形跡はみられない。死去の場所も、前掲の『吾妻鏡』の記事には記述がないが、

宗光が評定衆という幕府の要職に在ったことからしても、鎌倉か、もしくは相模の本領の地であったと察せられる。

土屋氏一族のうちで、相模の本領の地から河内の伊香賀郷に移った最初の人は誰であったのか。このことを推考する手がかりとなるものとして、土屋家所蔵の略系図に、宗光の子息光康に「伊香賀六郎」の称の付記されたものがある。『系図纂要』や『続群書類従』所収の土屋氏の系図では、宗光のあとは、いずれも「宗光—光時—遠経—貞遠—貞包」とされているのに対して、土屋家所蔵の略系図では「宗光—光康—康通—宗春—宗直」となっている。これらの中で、宗光の子息とされる光時の呼名が「弥三郎」であり、光康の呼名が「六郎」と記されていることから推して、光康は光時の弟であると考えてよいようである。もしそうであれば、宗光の没後、弥三郎光時は土屋氏の嫡宗を継いで相模国土屋荘の本領に引きつぎ住したのに対して、舎弟のひとり六郎光康が、承久新恩の地である河内国伊香賀郷の地頭職を継いで、やがて東国からこの地に移り住み、「伊香賀六郎」と呼称されるようになったと解されるのである。文書四〇の土屋兵齋書状の中に、

承久兵乱之時、為勲功之賞、於河内国給領地、自中比、依有事之縁、令居住之、

とあるが、この記事の「中ごろより」というのが、鎌倉中期の果していつのことなのか、その年次を明確にすることは、いま困難である。しかし、ともかく宗光の子息のひとり六郎光康が、東国から居を移して伊香賀郷を本拠の地とし、河内の土屋氏の祖となったことは、ほぼ確かな事実であると考えてよいであろう。

## 二

以上のように、河内国伊香賀郷の地頭職は、土屋宗光が承久の乱における勲功の賞として付与され、嘉禎元年宗光の没後、子息のひとり六郎光康がこれを相伝して、やがて土屋氏の本領の地である相模から河内の伊香賀郷内に居を移したと推察されるのであるが、その後の河内土屋氏の動向は、鎌倉末にいたるまで明らかでない。現存する土屋家

文書の中で最も古いものは、鎌倉末期の正中二年（一三三五）七月十一日付、沙弥宗春の讓狀である。宗春は前掲の土屋家所蔵の略系図によれば、光康の孫とされている。ただし、系図には宗春を実名のように記しているが、讓狀に「沙弥宗春」とあるから、宗春は道号である。実名については明確ではないが、文書五の足利尊氏御判御教書に、

河内国伊香賀郷地頭職事、為本領、任宗綱知行之旨、土屋孫次郎宗直、如元可領掌之狀如件、

建武三年三月五日

とみえているのは、足利尊氏が、正中二年の沙弥宗春の讓狀の旨を、このとき改めて承認して、土屋孫次郎宗直に伊香賀郷地頭職を安堵しているものとみとめられる。さすれば宗綱というのが、沙弥宗春の実名と考えてよいのではないかと思われる。讓狀の内容は、伊香賀郷地頭職が重代相伝の所領たることをいうとともに、嫡子の弥太郎は、「いたづらもの」で幕府からの御用に役立たないものであるので、次子の孫次郎宗直に惣領職を讓る旨が述べられている。そして土屋家文書の中に、このうち最も多く伝存されているのは、この孫次郎宗直に關係する文書である。

しかし、正中二年に宗直が伊香賀郷地頭土屋氏の家督を継いで、元弘の乱から建武中興への時期における宗直の動向をうかがい得る史料は見当らない。宗直の活動が明らかになってくるのは、建武二年（一三三五）八月に足利尊氏が北条時行の乱鎮定のために京都から鎌倉へ軍を進めたときからである。文書二・三・四は、いずれも、このとき尊氏の軍勢に従って行動した宗直の軍忠狀である。このうち文書二は、八月十八日・十九日の相模河・片瀬河の合戦の軍忠で、このあと北条時行を破って鎌倉に入った尊氏は、同年十二月建武政府に叛して京都へ攻め上るが、文書三は、その途次、建武三年正月二日、延暦寺衆徒の桶籠った近江国芦浦の伊岐代城攻略戦<sup>⑥</sup>、文書四は、正月十六日京都へ攻め入って新田義貞の軍勢と三条河原に戦ったときのものである。この三通の軍忠狀の證判の花押は同一のもので、文書四の證判の肩に「惣領土屋三河守」の付箋がある。この土屋三河守は恐らく相模国土屋莊の嫡家の惣領で、庶流である伊香賀郷の土屋宗直は、尊氏の軍に従って東国へ下るとともに、相模国で同じく足利方の軍勢に加わった土屋

惣領家の手に属し、その指揮下に行動するようになったものであろう。⑦ともかく土屋宗直が、建武二年八月以後、足利方の軍勢として活動したことは、これらの軍忠状によって明らかである。

前掲の文書五の足利尊氏御判御教書は、建武三年三月五日付であるが、これは京都周辺での戦に敗れた尊氏が、一時鎮西にまで退いて、三月三日大宰府に入った時期である。そして尊氏は、このころ西国の武士たちに、しきりに軍勢催促状や、所領安堵の下文あるいは御教書を送って、兵勢を固めようとしているが、土屋宗直に付与された御教書も、それらのうちの一つである。ただし、このとき宗直が、尊氏の鎮西下向の軍に従軍していたのか、それとも所領の伊香賀郷にとどまっていたのか、この点は確定し難い。

次の文書六の土屋宗直申状は、年付がないが、内容からみて、足利政権成立後のものと思われる。建武四年か、それに近い時期のものであろう。この申状の中で宗直が訴えているところは、伊香賀郷内において、他の何びとかに所職が与えられようとしていることに対する抗議の愁訴であって、伊香賀郷と同様、もと能登守藤原秀康の所領であった讃良郡甲可郷において、先年、地頭長江氏と雑掌との間に起った相論の場合の事例を挙げて、伊香賀郷における地頭土屋氏の知行権は一郷に及ぶべきものであることを主張しているのである。この愁訴の結果がどうなったかは不明であるが、文書一二の細川顕氏の書下かきくだしに、伊香賀郷内の土屋十郎および田宮孫与一の跡を、兵糧料所として知行すべきことを、土屋宗直に令しているから、少なくとも、この書下が出された暦應二年（一三三九）八月以前に、宗直以外の者の知行地が郷内にあったことは確かである。

文書七・八・九は、建武四年（一三三七）の七月から十月にかけて南北両党が河内・和泉の間に合戦したときのもので、このとき土屋宗直は、北党の大將軍細川顕氏の率いる軍勢に属して、八尾から東条にいたる間の中河内・南河内の一帯で活動している。また文書一〇は、建武五年三月、鎮守府大將軍北畠顕家が、後醍醐天皇の皇子義良親王を奉じ、陸奥の南軍を率いて西上し、河内を経て摂津の天王寺に攻め寄せたとき、宗直が足利方の軍勢として、河内古

市・摂津渡辺・天王寺・阿部野、あるいは男山・交野などに転戦した際の軍忠状である。文書一の後醍醐天皇綸旨は、その翌年（南朝延元四年、北朝暦應二年）のものであるが、この綸旨に名の出てくる土屋宗元および土屋三郎兵衛尉が、宗直と如何なる関係にある人物か、よく判らない。これらが南朝方に党していたことは明らかであって、しいて臆測すれば、宗元は、文書一の沙弥宗春讓状の中にみえる、父宗春から「いたづらもの」として廃嫡された弥太郎、三郎兵衛尉は弥太郎の子息ではないかとも思われる。ただし、これは確證はなく、全く臆測の域を出でない。しかし、ともかく河内の土屋氏一統の中に、このころ惣領である宗直らとは別の行動をとって、南朝方に与党していた者もあったことは、この綸旨によって明らかである。ただ、この綸旨が、南風競わざる情勢のもとにおいて、実効のともなわないものであったことも、また確かである。この綸旨の出された日からおよそ四ヶ月後の、延元四年八月十六日、文書一二の細川顯氏書下が宗直に付与されたと同じ日に、後醍醐天皇は吉野において崩御された。

それから十年のち貞和五年（一三四九）ごろから、將軍尊氏の弟直義と、尊氏の執事高師直との間の不和が表面化し、足利政權を二分するいわゆる觀應の擾乱が起るが、觀應元年（一三五〇）十月下旬には直義は京都を逃れ出て大和方面へ身をかくし、一方、尊氏は高師直を率いて、直義の養子直冬追討の軍を山陽道に進めることとなる。そして、この尊氏・師直の西下の間に、直義は南朝に款を通じ、畿内・西国諸地方の武士に檄を飛ばして、高師直・師泰兄弟追討の兵を起すべきことを促している。文書一四は、このころ直義から土屋宗直に送られた軍勢催促の御教書で、この文書の出される前々日、十一月二十一日に、直義は大和から、畠山国清の拠る南河内の石川城に入っている。しかし、この直義からの軍勢催促状をうけた宗直が、ただちに直義党ないし南党に應じて行動したかどうかは疑わしい。文書三三の土屋宗能の目安の中に、「同国中布利者、觀應二年二月二日、大御所・中御所御時、為勲功之賞、賜御下文、知行無相違之處」と記され、直義の軍勢催促状をうけてから約二ヶ月後には、尊氏の側から、伊香賀郷に隣接する中布利（中城）の地を勲功の賞として与える旨の下文を賜わったとしている。この下文の原本は現存していないが、

観應二年二月のころは、前年の末に直冬追討のために山陽道を備前福岡まで下向していた尊氏が、畿内における直義挙兵の報に接して、急速軍勢をかえし、京都の周辺において直義勢と戦を交えていた時期であって、このころ各地の武士に対して、軍勢の催促や恩賞付与の下文が、直義側からも、また尊氏・義詮父子の側からも、数多く出されている。従って、この時期に、土屋氏が果してどちらの側に味方したかは、文書をうけているということだけでは必ずしも明らかではなく、あるいは首鼠両端を持しつつ、形勢の推移をうかがっていたかも知れない。

その後、観應二年二月二十日には一度、尊氏と直義との間に和解が成るが、二月二十六日高師直・師泰兄弟が直義党のために襲殺されたことによつて、再び尊氏と直義の和解は崩れた。そして八月には直義は京都を出でて鎌倉へ奔り、一方、十月には尊氏・義詮が南朝に降り、十一月七日、北朝の崇光天皇を廃して、このとき以後、幕府も南朝の正平六年の年号を用いるなど、観應二年（正平六年）の経過の間に政情は大きく変転していったのである。かくして正平七年（一三五〇）に入ると、前年末から直義追討の軍を鎌倉に進めていた尊氏は、正月のはじめ直義と再度和解して鎌倉に入ったが、二月にはついに直義を鎌倉において毒害した。この間に畿内においては、楠木正儀・北畠顯能らの南党が、閏二月には京都を攻略し、將軍尊氏の東国出陣の留守を守る義詮を近江に奔らせ、南朝の後村上天皇も、土屋氏の本拠伊香賀郷に程近い男山まで行営を進められた。

土屋家文書一五および一六の軍忠状は、このような情勢の推移の中で出されたものである。そして、この二通の軍忠状の差出された宛先が楠木正儀の陣営であつたことは、ほぼ間違いない。證判の花押は二通とも同じであるが、これが誰の花押か明らかでない。しかし、この花押は文書一八の河内国々宣の奉者である左衛門尉の花押とも、また同一のものである。しかも、この国宣は、文書一七の楠木正儀の書下をうけて出されているものであるから、左衛門尉が、楠木正儀の受命者の地位にある人物であることは確かである。更に、この花押は、應安から康暦年間のころに、同じく楠木正儀の書下を遵行している文書二七および三〇の河野辺駿河守の花押に極めて類似しているので、この河



野辺駿河守の身近な人物（父もしくは兄弟など）の花押であるかも知れない。少なくとも正平六年の秋から正平七年の春にかけての時点において、土屋宗直およびその子息の泰宗・信宗らが、南党の楠木正儀の軍に属して行動していたことを知ることができる。そして文書一七の楠木正儀書下、および、その書下の旨をうけた文書一八の河内国々宣によって、宗直は楠木正儀から、伊香賀郷の一分地頭職を安堵されているのである。これらの文書の出された正平七年三月という時点は、前述のごとく、楠木正儀らの手中に京都が掌握されていた時期でもあった。

また、これらの文書において注目されることの一つは、文書一六の軍忠状に、土屋氏自身が「伊香賀郷一分地頭」と称し、楠木正儀書下および河内国々宣にも「伊香賀郷壹分地頭職」と記されていることであって、このころ伊香賀郷内に土屋宗直とは別の、一族か、もしくは他の者の知行権が入りこんでいたことが察せられる。更にまた、このとき楠木正儀の書下の旨を遵行した文書が、河内国々宣という形式をとって出されていることも注目されることであって、南朝のもとで、正儀は当時、河内の国主の地位が与えられていたことを知ることができる。

### 三

正平七年の春、楠木正儀らの南党によって一時占拠された京都は、前記の国宣が出された直後の三月十五日には、足利義詮の軍勢の反撃によって奪回され、次いで五月十一日には後村上天皇の男山の行營も陥落して、南朝方軍勢は兵を南方へかえすこととなる。そして土屋氏は、このち七月には足利義詮から、南党退治のため河内東条へ発向すべき旨の御教書をうけ、宗直の子息泰宗・信宗らが、このころ河内守護となった高師秀<sup>⑨</sup>の手に属して出陣し、八月から十一月にかけて、摂津渡辺・天王寺・平野・吹田などにおいて楠木・和田らの南党と戦っている。文書一九の高師秀挙状および文書二〇の土屋信宗軍忠状は、そのことを示すものである。信宗の軍忠状の冒頭に、「去七月十六日、可発向東条之由、預御教書」とみえている足利義詮の御教書は、その原本はのこされていないが、同じ観應三年（正

平七年)七月十六日付で、摂津の土豪伊丹左衛門四郎や渡辺四郎左衛門尉に宛てて出されている義詮の御教書に、

東条凶徒退治事、所差遣越後刑部丞師秀也、早令発向、可致忠節之状如件、

とみえているのと、恐らく同文のものであったと思われる。

なお義詮は、正平七年閏二月二十日に楠木正儀らの南党に京都を攻略され近江に逃れた時点から、もとの北朝の年号である観應三年の年号を用い、鎌倉に在った尊氏も三月十一日ごろから、やはり観應の年号に復しているが、同年八月十七日、尊氏は先帝崇光上皇の弟の後光厳天皇を再び北朝の天皇に擁立し、九月二十七日には年号も文和と改めた。

このころ土屋宗直は老齢もしくは病身になっていたのか、正平七年以後の軍忠状は、すべて子息泰宗・信宗のもので、宗直はみずからは合戦の場に臨んでいないが、文書二一の讓状にみられるように、文和二年二月三日、伊香賀郷地頭職を子息右衛門尉泰宗に讓っている。ところが、文書二四の延文二年三月十二日付で足利義詮が、この宗直の讓状の旨を承認している御教書には、

河内国伊香賀郷地頭職事、任土屋河内守宗直讓状之旨、嫡男右衛門尉宗春、如元可領掌之状如件、

とあって、宗直から地頭職を讓られた嫡男を「右衛門尉宗春」としており、讓状の「右衛門尉泰宗」との違いをどう解釈すべきかの問題が生じる。一つの解釈としては、泰宗と宗春は同一人で、延文二年(二三五七)は文和二年(二三五三)から四年後であるから、その間に泰宗が宗春と名を改めたと考えられることもできる。しかし、この義詮の御教書から更に二ヶ月あとの五月八日、細川頼之が幕府の執事仁木頼章に呈している挙状(文書二五)には、

土屋河内右衛門尉泰宗舍弟新三郎信宗、自最前、御方候上、今者属当手、致忠節候、

とあって、再び「右衛門尉泰宗」と記されており、これを、またどのように理解したらよいのか、判断に迷わされる、ただし、細川頼之は前年七月のころ以来、中国地方の足利直冬党追討の幕命をうけて山陽道方面へ出陣中であって、

この挙状は、そのとき頼之の軍勢に、泰宗の舍弟信宗が従軍して忠節をつくしていることを述べているものであるから、あるいは頼之は、泰宗の改名のことをいまだ知らず、もとの名乗を記したものであるかも知れない。ともかく、これらの点をいかに判断すべきか、なお疑問としてのこる。

文書二八、康暦元年（一二七九）八月五日付の讓狀の淨光というのは、泰宗（宗春）の道号と思われ、伊香賀郷地頭職など相伝の所領が、この日、淨光から更に子息の次郎宗能に譲られている。泰宗が入道して淨光と号するようになったのは、文書二六の楠木正儀書下の宛所に、『土屋河内右衛門入道殿』とみえているから、すでに應安二年（一二六九）以前からであったことがわかる。

楠木正儀が土屋河内右衛門入道に宛てて、本領安堵の書下を付与している應安二年四月のころには、正儀は北朝足利幕府の側に帰順していた。これより二年前の貞治六年六月ごろから、正儀は、その代官河野辺駿河守を將軍義詮のもとへ遣わして、南北和睦のことを議せしめていたが、同年十二月七日義詮が死去し、足利義満が家督を継いで將軍となつてのち、應安二年正月二日、正儀は新將軍義満に款を通じた。正儀は南朝のもとで、以前から河内の国主の地位にあつたことは前述したが、幕府に帰順するとともに、幕府からも引きつづき河内の国主の地位を安堵されていることが、文書二六および二七によつてうかがえる。そして、それは同時に河内守護の地位に相当するものであつたようである。従つて、正儀の書下の旨を遵行している河野辺駿河守は、守護正儀のもとにおける河内守護代と考えてよい。かくして土屋氏は、さきの正平七年のときにつづいて、今度は北党となつた楠木正儀から、改めてまた、その本領を安堵されることになつたのである。また二九・三〇の康暦元年九月二十五日付の文書も、河内守護楠木正儀の書下を、守護代河野辺駿河守が遵行しているものである。

應安二年に幕府に款を通じ、爾後十三年の間、足利政権のもとで河内の国主（同時に河内守護）の地位にあつた楠木正儀は、永徳二年（一三八二）のはじめにいたつて、再び南朝に帰参した。そして閏正月には和泉守護山名氏清の軍勢

と河内の平尾（丹南郡）に戦っているが、正儀の南朝帰順と同時に、当然、幕府は河内の守護職を正儀から召し上げ、かわって畠山基国が河内の新守護に補任されている。文書三一は、この年二月三日、新守護畠山基国が土屋宗能に宛てて送った書状であって、

河内国守護職事、被仰付候之間、近日可進発候、就其、面々自元御方忠節異他候敷、早々令参給候者、悦入候と、基国が河内守護職を幕府から仰付けられたことを報ずるとともに、近日楠木の党討伐のために進発するから、早々味方に参って忠節をつくしてほしい旨を述べている。次いで二月五日には、文書三二にみられるごとく、管領斯波義将からも將軍家（足利義満）の御教書が宗能に付せられて、味方に参じて忠節を致さば、本知行の地を安堵する旨が示達されている。かくして土屋氏は、この後はまた新守護畠山基国の指揮下におかれることになったと思われる。

南北朝内乱期の土屋宗直・泰宗・宗能の時代を通じて、河内の土屋氏は、あるいは北党となり、また、ときには南党にくみして、その去就は必ずしも定かでないものがあつた。しかしこのことは、南北朝争乱という激動の時代の渦の中で、しかも京都の幕府勢力と、南河内・南大和を主要な根拠地とする南朝勢力との、まさに中間にはさまれた位置にある北河内地方の一小地頭としては、止むことを得ない動きであつたといえよう。伊香賀郷の土屋氏のごとき環境下におかれた武士が、時代の激流の中を生き抜くためには、絶えず政情の動きを敏感に読みとりつつ、みずからの行動を巧みに律してゆかなければならなかつたことは、むしろ当然であつて、去就定かならざる土屋氏の動向には、当代のそのような武士たちの姿が、まざまざと示されているといつてよいであらう。そして、このような困難な境地におかれていた土屋氏にとっての、重大な破綻の一時期が、南北朝の最末期において起つたのである。

#### 四

土屋家文書三三、應永五年（一三九八）四月日付の土屋宗能目安案に、

河内国伊香賀郷地頭職者、承久三年九月六日拝領以来、至于今、代々知行無退転之處、依有事之縁、被加山名(氏清)奥州之扶持訖、就此、号闕所、触上聞、掠賜之間、不達申是非、徒送年月之条、愁訴何事如之哉、

と記されている。これは、南北朝合一の前年の明德二年（一三九二）に、山名氏清・同満幸らが幕府から追討された、いわゆる「明德の乱」に、土屋宗能が山名陸奥守氏清に加担したものととして、伊香賀郷地頭職を没収されたことを述べたものである。宗能自身は、山名氏清の反乱に加わったとされるのは無実であると訴えているのであるが、しかし「依有事之縁、被加山名奥州之扶持訖」と記しており、縁あつて山名氏清の扶持をうけるようになっていたことはひとめてゐる。

氏清と宗能との結びつきが、どのような事情で、いつごろから生じたかは明確ではないが、河内の隣国である和泉および山城国の守護であつた氏清が、河内国内にもかなりの勢力を扶植していたことは事実と思われる。氏清がはじめて和泉守護になつたのは、永和四年（一三七八）で、『後愚昧記』の同年十二月二十三日の条に、「伝聞、紀州守護山名修理大夫補之、美作国相関知行也、又山名奥州補和泉守護、為南方退治也」とみえているように、これは南方退治の使命を帯びてのものであつた。このころ紀伊国内で南党橋本正督らが兵を起したのに対して、氏清の兄で美作守護であつた義理を細川氏にかえて紀伊守護とし、同時に、丹波守護であつた氏清を和泉守護に兼ねて任じ、南党鎮庄のことに当らせたのである。このときまで和泉守護職は、楠木正儀が河内守護職と併せ保有していたのを召し上げて、氏清に付与されたものである。当時、楠木正儀は幕府に帰順してはいたが、楠木氏と橋本氏とは、もともと同族で河内・和泉地方に本拠をもつものたちであり、このような関係からも、幕府は敢えて正儀の和泉守護にかえて、新たに氏清を補任し、和泉・河内・紀伊地方の南党鎮庄のことを山名氏の手に乗ねたのである。これは幕府が当時、山名氏一族のもつ武力に深く依頼するところがあつたからである。

かくて和泉守護を拝任した山名氏清は、永和四年の暮から翌年のはじめにかけて、兄の紀伊守護山名義理らとともに

に、南党楠木正督の軍の活動を鎮定している。そして永徳二年（一三八二）のはじめに楠木正儀が幕府から離れて南朝に帰参した際にも、前述のごとく、氏清は正儀追討の主将となって河内国に進攻しており、その後、嘉慶二年（一三八八）春には、同じく河内に兵を出して楠木正秀の軍を討伐し、明徳元年（一三九〇）春にもまた、河内守護畠山氏とともに、南党楠木・和田追討の兵を河内に進めている。このように、和泉守護に補任されて以来、山名氏清の武力は河内国内にも深く浸透するものがあり、国内の武士たちへの影響力も、かなり大なるものがあつたと考えられる。この間また、至徳二年（一三八五）には、山城守護職も山名氏清に付せられており、このころ氏清の勢威は、守護大名の中でも、ひときわ高いものがあつた。このような情況のもとで、河内国内でも最北部の、山城国に接する地域の地頭である土屋宗能が、河内の守護たる畠山氏以上に強い結びつきを、山名氏清との間にもつようになったことは、むしろ自然の成行として理解できるものがある。

このような結びつきが氏清と宗能との間に生じていたことは事実であつたとしても、そのことからただちに、明徳の乱の際に宗能が氏清に加担したとは必ずしもいえない。明徳の乱の経過を詳細に伝えている『明徳記』の記事に、この乱に山名氏清と行動を共にした一族の山名満幸の率いる軍勢の中に、麾下の有力な武士団として「土屋党」の名が出てくる。しかし山名満幸は丹後および出雲の守護であつて、その麾下の軍勢に河内の土屋氏の党が属していたかどうか疑問であり、宗能もその無実を主張しているように、『明徳記』に活躍を伝える山名満幸麾下の土屋党を、河内国伊香賀郷の土屋氏に安易に結びつけて考えることはできない。その他の史料からも、河内の土屋氏が明徳の乱に際して実際に山名氏清に加担していたか、それとも宗能の主張のように無実であるのか、その真相を確定することは困難のようである。しかし幕府が当時、土屋宗能に対して、「謀叛同意」と判定したことは確かであつて、文書三五の土屋宗怡申状に、

河内国伊香賀事、為承久三年御下知、至明徳四年、先祖代々知行無相違処、山名奥州謀叛同意之由申掠、達上聞、

（氏清）

彼領知、進士石見先祖申給候、

とみえているごとく、明徳の乱後二年、南北朝合一の翌年である明徳四年（一三九三）にいたって、土屋氏の伊香賀郷地頭職は召し上げられ、かわって進士氏に付与されたとしてゐるのである。このことは確かな事実であって、次のごとき河内守護畠山基国の遵行状が、猪熊信男氏所蔵文書の中にみえる。

河内国伊香賀郷地頭職事、任御施行之旨、可沙汰付進士三郎貞吉之状如件、

明徳四年十一月二日

（畠山基国）

（花押）

遊佐河内守殿  
（長護）

すなわち、伊香賀郷地頭職を進士三郎貞吉に付与すべしとの將軍義満の御教書の旨を奉じて、河内守護畠山基国が、同国守護代遊佐河内守長護に、その遵行を命じてゐるものである。<sup>⑧</sup>かくして伊香賀郷地頭職は、土屋氏の領有から離れることとなり、また前掲の文書三三の土屋宗能目安によれば、伊香賀郷に隣接する中布利の所領も、守護被官らに押領されたといひ、河内土屋氏は、ここに一時没落の悲境の中におかれたのである。

文書三四、應永十年六月十五日付の讓狀の署名「義照」は、土屋宗能の道号と推察されるが、この讓狀で義照は、なお伊香賀郷地頭職や中布利の所領を、新三郎清遠に永代譲り渡すといつてゐる。しかし、それは恐らく実質のともなわなないものであったとみてよいであろう。文書三五の土屋宗怡申狀の中に、宗能の所領が没収されてのち、一族の八郎左衛門という者が、守護畠山基国の被官に召し出されようとしたが、「謀叛同意の者と一類の由」との幕府の沙汰によって、退けられたとしてゐるから、土屋氏に対する幕府の処断は、かなり厳しいものがあつたとみなければならぬ。

## 五

文書三五の申状の差出人である土屋宗怡は、宗能の孫であるが、申状に記すところによれば、明徳の乱によって一時没落した土屋氏が、再興の機会を得ることができたのは、宗怡の父宗吉（宗能の子）の代になってからである。<sup>⑧</sup>すなわち宗吉は嘉吉三年（一四四三）に、畠山基国の孫にあたる畠山持富の被官に召し出され、次いで宗怡のときにいたって、持富の子息である畠山政長から、応仁の乱のころか、その居城河内の正覚寺城<sup>⑨</sup>において、所領安堵の下知を賜わったとしている。この申状は年付がなく、差出された年次は不明であるが、畠山政長を宝隆寺殿と記しているから、明應二年（一四九三）閏四月に、政長が細川政元の軍勢と戦って、正覚寺城において自刃を遂げたのち、政長の子息尚順もしくは孫の植長の代になって書き出されたものであろう。袖判も写のため明確でないが、尚順か植長の花押を写したものである。宛所の丹下孫三郎は、同じく畠山氏の被官で、在地において守護の命を土屋氏に渡付する位置にあった武将である。

文書三六の遊佐順盛は、戦国初期の永正・大永年間のころ、畠山尚順、その子息植長のもとで、河内守護代として活躍した人物で、この書状も年次は不詳であるが、淀川の洪水によって伊香賀の堤が大破して、河水が氾濫したことについて、堤の修築のことを、日限を切って、土屋方へ嚴重に仰付けるようにとの旨を、丹下備後守に申送っている。文書三七の薬師寺與一は、河内守護代遊佐順盛と同時代に、細川政元の被官として摂津守護代の任にあり、権勢をふるった人物であるが、永正元年（一五〇四）九月に、摂津守護細川政元を廃して養子澄元の擁立を企て、山城の淀城に拠って反乱を起し、追討されている。<sup>⑩</sup>薬師寺與一が書状を送っている相手の土屋蔵介は、土屋宗怡と如何なる関係にある一族か不詳であり、また文書の年次も明らかでないが、蔵介は薬師寺與一の軍に従って長々在陣し、その功によって、伊香賀郷と淀川をへだてた対岸にあたる摂津国島上郡地方の国衆目賀田氏の跡職を付与されている。

文書三八の遊佐長教は、遊佐河内守順盛に次いで、天文年間のころ、河内守護畠山植長・政国・高政のもとで河内守護代の任にあった人物である。<sup>⑪</sup>宛所の土屋喜左衛門尉は、実名を宗仲といい、宗怡の孫と推定される。守護代遊佐



長教と同じころ、畠山植長・政國・高政の被官であつた。書状の内容は、前掲の遊佐順盛の書状と同様、淀川堤の修築に関するものである。文中の「出口」は伊香賀郷の南方に当り、出口の淀川堤の修築について土屋宗仲の奔走に謝辞を送っている。伊香賀郷は淀川中流の左岸に臨む地域であつたから、この付近の淀川堤修築のことは、在地の領主として土屋氏の重要な為事の一つであつたことが、これらの書状からも察知できる。文書三九の土屋入道宗喜は、喜左衛門尉宗仲の入道後の道号である。

文書四〇の土屋兵斎は、宗仲の子息のひとりであるが、この兵斎の書状に記すところによれば、宗仲は或る年、畠山氏と大和筒井氏の合戦のとき、大和の当麻寺の曼陀羅堂に陣を構え、不慮の魔障に逢つて堂下に転落し、ために行歩困難となつて、早く家督を嫡男の弥兵衛尉に譲つたとしてゐる。しかし、この弥兵衛尉も、その後、畠山氏と三好氏が和泉の久米田表で戦つたとき、二十六歳の若さで討死を遂げたといひ、そのときを、兵斎書状には「永禄四年四月三日乎」と記しているが、これは、兵斎自身も一応疑問符をつけてゐるように、年次を誤つてゐる。畠山と三好との和泉久米田表の合戦といへば、永禄五年（一五六二）三月五日に、畠山高政が紀伊根来寺衆徒らとともに、三好義賢の軍勢を和泉久米田に打ち破り、義賢を敗死せしめたときの合戦のことであらう。かくして土屋宗仲は、みずからは歩行不能のうへ、頼みとした嫡子弥兵衛尉を失ひ、全く失意落魄のうちに、天正六年（一五七八）六十六歳をもつて世を去つたと伝えてゐる。

兵斎は弥兵衛尉の弟で、この兵斎以後のことは、土屋家所蔵の「土屋姓系図由緒」によつて、ほぼ明らかにすることができ。兵斎は若年のころ一時、京都妙心寺の塔頭養源院に入つてゐたが、のち寺を出て、縁あつて豊後の竹田城主中川秀成に仕え、元和七年（一六二一）以後、間もないころに豊後国で死去した。兵斎の子喜左衛門宗基は、幼少のころから父と離れて成長し、やがて讃岐の高松城主生駒岩岐守高俊に召し出されて七百石を賜わる身となつたが、寛永十七年（一六四〇）高俊が、家臣の騒動によつて封を削られ、出羽の由利に左遷されるに及んで牢人となり、その後は

京都の下立売に住して生涯を送り、延宝五年（一六七七）同地で死去している。宗基の養子武大夫宗淳は、養父死去の年、延宝五年に伊勢国久居<sup>ひさい</sup>の城主藤堂高通に召し出されて、はじめ二十五人扶持から、のちには百五十石を給せられるまでになった。爾来、土屋氏は、宗淳・宗経・武経・宗暁と相承けて、久居藩の藤堂家に仕え、殊に宗暁（武経の養子）は、享和二年（一八〇二）から、起倒流の柔術指南を藩主より仰付られ、それ以後、宗郷・寿宗も（当時二十五石五人扶持）引きつづき久居藩の柔術指南役を勤めて、明治維新に及んだのである。

## 註

- ① 中村莊は、現在の神奈川県足柄下郡橋町のあたりである。
- ② 『関東評定伝』文暦元年の条。
- ③ このことについては、田中稔氏が「承久京方武士の一考察」（『史学雑誌』六五編四号）の中でも論及されている。
- ④ 『大日本史料』第五編之一、承久三年十月六日の条参照。
- ⑤ 『大日本史料』第六編之三、延元元年正月二日の条参照。
- ⑥ 同右、延元元年正月十六日の条参照。
- ⑦ 土屋三河守については、『太平記』卷第十四「將軍進発大渡・山崎等合戦事」の条にも、建武三年正月九日大渡の合戦に足利方の部将の一人として、その名がみえている。
- ⑧ このことについては、すでに早く佐藤進一氏が『室町幕府守護制度の研究』上の「河内」の項で論及されている。
- ⑨ 高師秀は、前年直義党のために襲殺された高師泰の子息で、男山陥落後、間もなく河内守護に補任されたと思われる。（佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上、「河内」の項参照）。
- ⑩ 『大日本史料』第六編之十六、正平七年七月十七日の条所収の「北河原氏家藏文書」、「臺簡集殘篇」二「渡辺曾源次所藏文書」参照。
- ⑪ 小川信『細川頼之』（人物叢書一六四）第三「四国・中国の経略」の条参照。
- ⑫ 『師守記』貞治六年六月八日および十四日の条。
- ⑬ 『花宮三代記』應安二年正月二日の条に、「正月二日、楠木左兵衛督依可参御方之由申之、被成御教書畢」とある。
- ⑭ 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上、「河内」の項参照。
- ⑮ 「三刀屋文書」永徳二年三月日、須波部新左衛門入道軍忠状。『後鑑』卷八十七、永徳二年閏正月二十四日の条。なお楠木正儀は、應安二年から永和四年の末まで、和泉守護（兼国主）でもあった。
- ⑯ 佐藤進一『室町幕府守護制度の研究』上、「和泉」の項。拙稿「南北朝内乱期における山名氏の動向」（『武家時代の政治と文化』所収）参照。
- ⑰ 『南方紀伝』嘉慶二年および明德元年の各条。
- ⑱ 『興福寺略年代記』至徳二年の条に、「山名奥州給守護職、

入部山城国、堂舎仏閣民屋等、多焼失破壊云々」の記事がある。なお『後鑑』巻九十、至徳二年十二月三日の条参照。

- ①⑨ 『大日本史料』第七編之一、明徳四年十一月二日の条参照。

②⑩ 宗能が應永十年の讓状で、所領を讓渡している新三郎清遠と、宗怡の父宗吉とは、どのような関係になるのか明確でない。清遠がのちに宗吉と改名したのか、もしくは、宗吉は清遠の兄弟ということになるであらう。

②⑪ 正覺寺城は河内国渋川郡、現在の大阪市東住吉区加美正覺寺町にあり、畠山政長の居城であった。政長は明應二年閏四月二十五日、細川政元の軍勢と戦って、この城中に自刃を遂げた。

②⑫ 書状の中で「土屋かたへ可被仰付候」とある土屋は、恐ら

く土屋宗怡と思われる。また宛所の丹下備後守は、文書三五の丹下孫三郎と同一人であるかも知れない。

- ②⑬ 『宣胤卿記』永正元年九月四日・十九日・二十日の各条。『後鑑』巻二百六十八、永正元年九月四日・十九日の各条。

②⑭ 遊佐長教は天文二十年五月五日、時衆の珠阿弥なる者のために暗殺されている。〔長享年後畿内兵乱記〕天文二十年五月五日の条。

②⑮ 畠山と筒井の合戦というのが、いつのことか年次不詳であるが、永禄二年八月に、畠山高政が三好長慶と結んで、河内守護代安見直政を河内高屋城から逐い、次いで松永久秀をして、直政の与党であった筒井順慶・十市遠忠ら追討のために、大和へ攻入らしめたときのことであるかも知れない。

②⑯ 『後鑑』巻三百三十三、永禄五年三月五日の条参照。

## 土屋家文書

### 〔一〕土屋宗春讓状

讓渡 河内国伊香賀郷地頭職事

右地頭職ハ宗春重代相伝の所領なり、しかるに嫡子弥太郎いたつらものにて、公方の御用にたちかたきうゑハ、孫次郎宗直に文書等をあいそゑて、惣領職をゆつりわた

すところ也、公方の御公事・軍役以下そのさたをいたし、知行をまたくすへし、又そしともゆつるふんハ、(金)をきふみのむねにまかせて知行さういあるへからず、但京都・関東の御公事ハ、ふん(分限)けんにしたかて、しはいすへし、惣領のしはいをそむきて、ふさ(不沙汰)たをいたさハ、さいくわ(罪科)に申をこない、そのあとを知行すへし、仍讓状如件、

正中二年七月十一日

沙弥宗春(花押)

〔二〕土屋宗直軍忠狀案

○以下〔一〕〔三〕〔四〕ノ三通ノ文書ハ、スベテ同筆デア  
ル、證判ノ花押モ三通トモニ同シデアルガ、〔四〕ノ文書  
ノ證判ノ肩ニ、「惣領土屋三河守」ノ付箋ガアル、

土屋孫次郎宗直申、去八月合戦之時、於相模河・片瀨河  
等、属御手、致軍忠候之上者、賜御證判、欲備後證候、  
以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武二年九月二日

平宗直

承候訖（花押影）

〔三〕土屋宗直軍忠狀案

土屋孫次郎宗直申、去正月二日於江州伊岐須宮合戦之  
時、懸先、被射右肘候上者、賜御證判、欲備龜鏡候、以  
此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年正月十五日

平宗直

承候了（花押影）

〔四〕土屋宗直軍忠狀案

土屋孫次郎宗直申、去十六日於三条河原懸先、被射右膝

候之条、御目前事候之上者、賜御證判、可備後證候、以  
此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

建武三年正月廿四日

平宗直

〔付箋〕  
「惣領土屋三河守」

承候了（花押影）

〔五〕足利尊氏御判御教書案

（足利尊氏）  
（花押影）

河内国伊香賀郷地頭職事、為本領、任宗綱知行之旨、土  
屋孫次郎宗直、如元可領掌之狀如件、

建武三年三月五日

〔六〕土屋宗直申狀案

河内国伊香賀郷地頭土屋孫次郎宗直申、当郷所務事、  
（藤原）  
本司能登守秀康知行例、所致其沙汰也、雖為承久勲功之  
地、或守本司例有下地進止郷、或追新補率法之例知行所  
在之、郷々所務皆以追本司跡、所致其沙汰也、且本郷甲

可郷地頭長江八郎左衛門尉与雜掌、先年相論之時、帶武家下知狀、下地知行、于今無相違之上者、不可縉一郷之例者也、所詮帶此等次第文書等、委細之旨、可令後日言上者乎、而無是非於被打渡当郷者、地頭佐僚何事如之、宗直雖為不肖之身、自最初参御方、被疵、於所々抽軍忠之条、云御感、云御證判、旁明鏡也、然者早被止当时打渡、被糺明真偽、任当知行之実、被経御沙汰、預御注進者、弥成弓箭之勇、為致忠勤、粗恐々言上如件、

三月廿七日

御奉行所

宗直

〔七〕土屋宗直軍忠狀

○コノ文書ノ證判ノ花押へ、〔九〕〔一〇〕ノ證判ノ花押ト同ジデアル、

河内国伊香賀郷地頭土屋孫次郎平宗直軍忠事、

一去七月四日夜、東条凶徒等、寄来八尾城之時、不惜身命、致合戦、追払凶徒畢、

一今月十六日、同凶徒等寄来之間、馳向五条河原、抽軍忠早、此条秋山孫八郎被見知早、

河内国土屋家文書について

一同十七日、恩智河原合戦、於中手、抽忠節畢、此条中振佐渡次郎入道・中河兵衛入道、同所合戦之間、見及早、且属当御手、御存知上者、非御不審之限歟、然者早度々軍忠異他之上者、預慇懃御注進、浴恩澤、且賜御判、欲備後證、仍言上如件、

建武四年八月 日

承候了（花押）

〔八〕細川頭氏感狀

致度々合戦之忠、且於八尾城被抽軍忠之条、殊以神妙、弥可致忠節之狀如件、

建武四年十月十日

土屋孫次郎殿  
(宗直)

(細川頭氏)  
兵部少輔（花押）

〔九〕土屋宗直軍忠狀

河内国伊香賀郷地頭土屋孫次郎宗直申、

去十月五日、東条凶徒等寄来八尾城、打卷四方、城内之堂舎・仏閣・矢藏・役所等、以火矢疎被燒失、為当番衆、

殊以不惜身命、抽軍忠、追弘凶徒了、此条秋山彦三郎殿・同彦五郎殿為城中、被見知了、即大將軍自天王寺御馳間、加御手、至古市・片山追懸凶徒、致合戰之忠、同十八日、為東条御退治御発向之時、同属御手、片山・古市・大塊・壺井・坂田・西浦罷向、所々焼弘之、同十九日、御向于東条之時、加御手、罷向山手、焼弘飛鳥里、

打通春日・太子、焼弘山田山城、打出寛弘寺河原早、其後至同廿三日、御逗留西琳寺之間、昼夜宿直、抽忠功早、此条御存知之上者、非御不審限歟、然早賜御判、為備後證、言上如件、

建武四年十一月 日

承了(花押)

〔一〇〕土屋宗直軍忠状

河内国伊香郷地頭土屋孫次郎宗直申、

去八日、為凶徒御退治、大將古市河原之御合戰之時、属御手、自古市河原至渡部、致合戰忠節、於京都御共仕畢、

將又同十二日、河州御下向之刻、一族等属御手、八幡合

戰仁致軍忠、同十四日、交野凶徒御追討之時同前、同十五日、木尻之夜攻仕、同十六日、楯籠天王寺凶徒没落之時、同於阿部野抽忠勤、每度懸御目之上者、不及御不審、然者早賜御證判、為備龜鏡、言上如件、

建武五年三月 日

承候了(花押)

〔一一〕後醍醐天皇綸旨

○コノ文書ハ京都大学国史研究室影写本ニヨル、

河内国伊香賀郷地頭職、土屋宗元并庶子等跡、為勲功賞、土屋三郎兵衛尉可令知行者、天氣如此、悉之以状、

延元四年四月五日

右中辨(花押)

〔一二〕細川顯氏書下

河内国伊香賀郷内、土屋十郎并田宮孫与一跡事、為兵糧料所、可有知行之状如件、

曆應二年八月十六日

(細川顯氏兵部少輔)  
(花押)

(宗直)  
土屋孫次郎殿

〔一三〕河内国々宣

(花押)

河内国茨田郡内伊香賀郷、当年国衙年貢、可有取沙汰之旨、国宣所候也、仍執達如件、

觀應元年九月廿八日

春福丸

伊香賀郷沙汰人御中

〔一四〕足利直義御判御教書

師直・師泰誅伐事、早可致軍忠之狀如件、

觀應元年十一月廿三日

(足利直義)  
(花押)

土屋孫次郎殿

〔一五〕土屋宗直軍忠狀

○コノ文書ト〔一六〕ノ文書ノ證判ノ花押ハ、〔一八〕ノ

文書ノ左衛門尉ノ花押ト同一デアル、

土屋孫次郎宗直申軍忠事

右宗直、去正平五年十一月之比、参御方、以来於所々致警固之处、為渡辺後攻、守口陣宿之刻、今河宮内大輔并芥河馬允已下之輩、率数多人勢、当年九月廿一日寄来当

所間、及散々合戦、宗直子息次郎右衛門尉被疵<sub>經</sub>、加之、同舍弟新三郎<sub>左</sub>被射早、此等次第、近隣傍庄、驚耳目者也、然早預御證判、為備向後龜鏡之狀如件、

正平六年十一月 日

一見了(花押)

〔一六〕土屋宗直代子息泰宗・信宗軍忠狀

河内国伊香賀郷一分地頭土屋孫次郎宗直代、子息泰宗・同舍弟信宗、自最初参御方、軍功不可勝計、就中去月廿日、於京都北小路町懸一陣先、致散々合戦、討取数輩御敵之刻、信宗被疵<sub>被射</sub><sub>左足</sub>之条、御検知之上者、賜御證判、為備龜鏡、言上如件、

正平七年三月十日

承了(花押)

〔一七〕楠木正儀書下

河内国伊香賀郷壹分地頭職、為本領相伝之上者、如元当知行不可有相違、仍執達如件、

正平七年三月十日

(楠木正儀)  
左衛門少尉(花押)

土屋孫次郎殿 (京通)

〔一八〕河内国々宣

河内国伊香賀郷沓分地頭職事、為本領相伝、不可有相違之由、国宣所候也、仍執達如件、

正平七年三月十二日

左衛門尉(花押)

土屋孫次郎殿 (京通)

〔一九〕高師秀挙状

土屋次郎右衛門尉泰宗申、恩賞替事、自最前属当手、于今致忠節候之間、令言上、可有申御沙汰候哉、若此条偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨、可有御披露候、恐惶謹言、

文和元年十一月十八日

刑部丞師秀(花押) (高)

進上 御奉行所

〔二〇〕土屋信宗軍忠状案

土屋新三郎信宗申軍忠事、

右去七月十六日、可発向東条之由、預御教書、自京都属

御手、八月十一日追払渡辺・天王寺凶徒等畢、同十四日、押寄平野正覺寺、追落凶徒等畢、同十五日、楠木・和田以下大勢寄来鳴森間、馳向中手、致散々合戦畢、九月廿日、八ヶ所内大和田敵城責落畢、同晦日、御敵等寄来柴嶋御陣之間、馳向渡辺河、致合戦之忠、至于吹田橋、抽戦功、追返凶徒等畢、十月廿五日、御敵寄来草刈三宝寺之刻、自吹田御陣打出、追散之凶徒等畢、十一月十三日、寄来吹田御陣時、於橋上致忠節条、無其隱者也、如此在々所々軍忠之次第、御見知上者、賜御證判、為備龜鏡、言上如件、

文和元年十二月廿日

承了(花押影) (高師秀力)

〔二一〕土屋宗直讓状

讓渡 河内国伊香賀郷地頭職事、

右地頭職ハ宗直重代相伝之所領也、しかるを子息右衛門尉泰宗に、文書讓状等をあいそゑて、永代ゆつりわたすところ也、但京都・關東の御公事・軍役以下の事等、そのさたをいたし、知行をまたくすへし、(高) (庶子) そしとものゆつ



りたるふんハ、故宗春のをきふミのむねにまかせて、さ

(相違)

うゐあるへからす、兄弟との事ハ、諸事あいはからい

て、そのふちをくわうへし、もしゆつり状のむねをそむ

かん仁にをいてハ、ふけうの物たるへし、よて讓状如件、

(扶持) (仍)

文和二年二月三日

河内守宗直 (花押)

河内守宗直 (花押)

〔二二〕 高師秀感状

於摂州・河州致忠節之条、尤神妙候、此等子細、可令注

進之状如件、

文和二年四月十五日

刑部丞 (高師秀) (花押)

土屋新三郎殿

〔二三〕 高師秀拳状

土屋新三郎信宗申、恩賞事、属当手、於摂州・河州所

々、致忠節候之間、令言上候、可有申御沙汰候哉、若此

条偽申候者、可罷蒙八幡大菩薩御罰候、以此旨、可有御

披露候、恐惶謹言、

文和二年四月十五日

刑部丞師秀 (高) (花押)

進上 御奉行所

〔二四〕 足利義詮御判御教書案

(足利義詮)

(花押影)

河内国伊香賀郷地頭職事、任土屋河内守宗直讓状之旨、

嫡男右衛門尉宗春、如元可領掌之状如件、

延文貳年三月十二日

〔二五〕 細川頼之拳状案

土屋河内右衛門尉泰宗舍弟新三郎信宗、自最前、御方候

上、今者属当手、致忠節候、恩賞訴訟事、申状如此、謹

進覽之、可有申御沙汰候哉、以此旨、可有御披露候、恐

惶謹言、

延文二年五月八日

右馬頭頼之 (細川) (花押影)

進上 左京大夫殿

〔二六〕 楠木正儀書下

本領事、如元知行、不可有相違候者、仍執達如件、

應安貳年四月廿五日

楠木正儀 (楠木正儀) 左兵衛督 (花押)

土屋河内右衛門入道殿

〔二七〕河野辺駿河守遵行状

本領安堵事、任御下知之旨、知行不可有相違候者、仍執達如件、

應安貳年四月廿五日

(河野辺)  
駿河守 (花押)

土屋河内右衛門入道殿

康暦元年九月廿五日

河野辺駿河守殿

(楠木正儀)  
中務大輔 (花押)

〔三〇〕河野辺駿河守遵行状

伊香賀郷地頭浄光・宗政等申、当郷牧分北川為村以下輩濫妨事、御下知如此、早可止其煩之旨、嚴密可加下知之状如件、

康暦元年九月廿五日

(河野辺)  
駿河守 (花押)

菱江兵庫允殿

讓渡 河内国伊香賀郷地頭職、同并里

中布利郷事、

右地者、浄光重代相伝之所領也、しかる間、數通御判手繼等を相副、次郎宗能に永代所讓渡也、たゞし御公事・

軍役以下の事、その沙汰をいたし、知行をまたくすへし、仍讓状如件、

康暦元年八月五日

浄光 (花押)

〔三一〕畠山基国書状

○コノ文書ハ京都大学国史研究室影写本ニヨル、

河内国守護職事、被仰付候之間、近日可進発候、就其面々自元御方忠節異他候歟、早々令參給候者、悦入候、恐々謹言、

(永徳二年)  
二月三日

(畠山)  
基国 (花押)

(宗能)  
土屋次郎殿

〔二九〕楠木正儀書下

伊香賀郷地頭浄光・宗政等申、当郷牧分北川為村以下輩乱妨事、書状如此、早可止其煩之旨、嚴密可被加下知状如件、

〔三二〕室町將軍足利義満家御教書

参御方、致忠節者、本知行之地、不可有相違之状、依仰  
執達如件、

永徳二年二月五日

土屋孫次郎殿  
(宗能)

左衛門佐 (花押)  
(斯波義將)

應永五年四月 日

件、

〔三四〕土屋義照讓状

讓渡 河内国伊香賀郷地頭職、同并里

中布利郷事、

右地者、義照重代相伝之所領也、然而數通御判手繼等を  
相副、新三郎清遠永代所讓渡実也、但於御公事・軍役以  
下者、致其沙汰、知行をまたくすへし、仍讓状如件、

應永十年六月十五日

義照 (花押)

〔三三〕土屋宗能目安案  
目安

土屋駿河守宗能謹言上

右河内国伊香賀郷地頭職者、承久三年九月六日拝領以來、至于今、  
代々知行無退転之處、依有事之縁、被加山名奥州之扶持  
訖、就此、号關所、触上聞、掠賜之間、不達申是非、徒

送年月之条、愁訴何事如之哉、次同国中布利者、觀應二年二月二日

大御所・中御所御時、(義隆)為勲功之賞、賜御下文、知行無相

違之處、無謂守護被管人等押領之段、是亦不便之次第

也、歎而猶有餘者哉、彼私領者、自曾祖父相統、至于宗

能、於当御代、致數十ヶ度軍忠、仍御一見状數通載而炳

焉也、何就暫時之事、可被処無年来之軍忠、且云安堵御

判、且云代々忠節、欲被垂御哀憐、所詮被成下嚴密御教

書、如元全当知行、弥為拙無貳之忠勤、粗目安言上如

〔三五〕土屋宗怡申状案

(花押影)

畏而申上候、

河内国伊香賀事、為承久三年御下知、至明德四年、先祖

代々知行無相違處、山名奥州謀叛同意之由、申掠、達上  
(氏清)

聞、彼領知、進士石見先祖申給候、其時分、拙者祖父宗

能依幼少、不申聞、恐上意罷退、永々令没落候、然間、

公方様御代々已後、親にて候者宗吉存知仕候様は、(備山基國)長禪寺

殿様如此就被成下御書、同名八郎左衛門御被官參候処、

謀叛同意之者与一類之由、就有殿中之御沙汰、欠落申

候、其由緒證文等、妙音寺殿様入御耳、(畠山特選)嘉吉三年親にて

候者参、于今拙者勘忍申候、か様之子細、(畠山政長)宝隆寺殿様被

知食分、於先年正覺寺有御申御沙汰、如此安堵被成下御

下知候、難有忝存候、於子孫、御恩忘申者、必可蒙御罰

事候、就中、越中国にて彼在所有申給仁之由候、将亦於

九州進士三郎左衛門安堵之由候、御入洛候者、定而可御

沙汰行候、其時御屋形様御成敗肝要候、仍而在所之事、

近年依水損、不可過四拾石候、自他替地被仰付候共、可

安御成敗存置候、此等之趣、可然御次、御披露奉憑候、

恐惶謹言、

三月二日 土屋次郎右衛門尉平宗怡

丹下孫三郎殿

〔三六〕遊佐順盛書狀

尚々、以日限、堤之儀承之候、其分嶋中へ可申付候、

出口之儀も、堤切候間、同前申遣候、

雖以使者可申、御沈酔之由候、然々と不申届候てへと、

直書にて申候、子細へ今度伊香賀堤及大破、十七ヶ所へ

水入候、連々此堤之事堅固ニ可申付旨、自嶋中も雖令催

促候、伊香賀ニ不令合致候敷、如此成行候、無是非次第

候、嶋の様躰、貴所にも淵底可有御存知候へ、不能申

分候、伊香賀水止等、無沙汰可有之条、自十七ヶ所罷上

候もの、堤を可築、令内談之由候、百姓難儀きわまり候

間、定而其はたらきを可成候敷、然者互に事を左右によ

せ、不慮の喧嘩等もあるべく候哉、所詮一兩日中ニ、以

日限、堤之儀、堅固ニ土屋かたへ可被仰付候、これ又御

異見之外あるましく候、いまつの儀も、三左かたへ此筋

目申遣候、恐々謹言、

五月廿三日 (遊佐) 順盛 (花押)

(切封ウハ書)

「(切封) 河内守

丹下備後守殿 順盛

進之候 」「

〔三七〕薬師寺與一書狀 (折紙)

上郡国衆目賀田跡職事、申合上者、可有御知行候、長々

御在陣、御辛勞難申盡候、恐々謹言、

藥師寺與一

八月廿三日

彌長（花押）

土屋藏介殿

御宿所

糺氏宮太輔殿

御宿所

〔四〇〕土屋兵齋書狀

追以実名之事、宗泰尤之理ニ候、愈先祖之祭礼無怠慢者、必応冥感、武運永可被保如意安全者也、万福々々、

〔三八〕遊佐長教書狀（折紙）

就出口堤之儀、為合力、自身被打越、別而御馳走之由、御氣遣本望候、榎野善左衛門尉令逗留候間、弥御入魂喜悅候、猶期面候、恐々謹言、

遊佐

三月廿二日

長教（花押）

土屋喜左衛門尉殿

進之候

〔三九〕土屋宗喜書狀案（折紙）

当鄉内買德分并散在加地子之儀、令免除上者、不可有別儀候、全可有知行者也、恐々謹言、

永祿四

土屋入道

十二月五日

宗喜

書狀之通承届候、仍先祖相統之事、頗往昔之由緒、雖不存知子細、凡所伝聞之趣者、元祖者為関東住人之故、經鎌倉殿御代、承久兵乱之時、為勲功之賞、於河内国給領地、自中比、依有事之縁、令居住之、又其以後東漂漂泊之日、尊氏相公於摂州宿河原、為軍中之御感、御鎧之袖符并手中之扇子、自馬上給、先祖信宗同被成御感狀、被宛行恩賞、是為家門幸之由伝云々、則自信宗至我父喜左衛門尉宗仲者、及五代言、猶有年而、宗仲者、事種長府君、且安堵無恙、略所従如元矣、于時畿内近国所々兵乱出来、合戦及度々事有之也、其節宗仲令被疵、有所勞之处、一年畠山与筒井合戦之時、於和州当麻曼陀羅堂構陣宿、逢不慮之魔障、落在堂下、漸雖令蘇生、終行步不叶

而、早被讓家督於嫡男弥兵衛尉也、然処、弥兵衛<sup>二十</sup>永  
 祿四年四月三日乎、於泉州久米田表、畠山与三好合戰之  
 時、被討死、自是宗仲弥忘氣重、天正六年七月十五日  
 六十<sup>六</sup>被死去、号歆仲宗喜居士、当斯時、世改約解、恩沢  
 之地廢、同先妣大誉宗清者、天正九年九月廿七日<sup>七十</sup>被  
 死去也、将又我等事、依之、外無立武藝之場、内不伝佛  
 乘之機、於進退惑道理、于今世路之營如此、加之、右證

文手繼等、多令亡失事、誠予多罪悔臍而已、心事不能筆  
 舌也、併貴所欲求之間、尋先祖功名之跡、至夙夜、無過  
 之地者、全可有其中者也、以上、

元和七年

兵齋

三月上澣七莫

(花押)

土屋又兵衛殿